

【書評・紹介】

呉人 恵 著 『コリヤーク言語民族誌』

(札幌, 北海道大学出版会, 2009年2月, xiii+379頁, 7600円+税)

津 曲 敏 郎



表紙画像

本書の概要

本書は、シベリア北東端のチュコト半島からカムチャツカ半島にかけて話されているチュクチ・カムチャツカ語族の一つ、コリヤーク語を対象とした言語民族誌の試みである。著者の呉人恵氏は、1994年からこれまで十数年にわたりロシア連邦マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区に居住するコリヤークの言語、コリヤーク語の現地調査を行ってきた。言語の現地調査が言語それ自体の記述を目的とするとは言うまでもないが、呉人氏は当該民族が暮らす現場に身を置かなかで、言語の背景にある文化にも深い関心をそそいできた。言語が急速に失われつつある今、彼らの伝統文化もまた衰退ひいては崩壊の途をたどりつつある。このような見地から、氏の研究は「言語の文法」すなわちコリヤーク語の音韻・文法の掘り起こしとならんで、「文化

の文法」すなわち民俗語彙の収集と分析を通じた民俗分類構造の解明、という2つの方向性を持ちながら、より包括的なコリヤーク語の記述をめざしてきた。

本学会でも昨年度、呉人氏の講演会を開催し、その調査研究の一端に触れる機会があった(津曲 2010)。危機言語に果敢に立ち向かう、というよりも、話者と真摯に向き合い、話者とともに何ができるか模索し、実践してきた著者の姿勢については、氏の前著(呉人 2003)からもうかがい知ることができる。そこには言語学者としての自問や葛藤、さらに希望や喜びが率直に語られている。

それに対して、本書では著者自身の思いは直接語られず、もっぱらコリヤークを取り巻く自然環境とこれに適応対処するための生業活動、さらには人の誕生と死をめぐる伝統的習慣のありようなどが、客観的に記述される。こうした文化の諸側面にかかわる民俗語彙を丹念に収集し、それらの語彙論的・形態論的・意味論的分析を行うことによって、ことばに刻印されたコリヤークの自然環境の範疇化、生業活動に現われた世界観から死生観までを炙り出そうとするものである。

ここで取られた、言語と文化の連関性に関する著者の基本的視座は以下のようなものである。すなわち、文化を環境と人間活動が相互に作用しあって織りなすネットワークと捉えるならば、そのネットワークのなかで、人はこれらの環境を固有な仕方でも認識するとともに、その認識にもとづき適応対処をはかっていく。そのような適応対処の社会的コードを獲得するに際して、言語は、環境を認識し整理する、言い換えれば「範疇化」するという、まさに文化形成の基盤として機能していると捉えるのである。これは言語学においては言語人類学、人類学においては構造主義的言語学の理論的枠組みを採用した認識人類学に近似した理論的立場である。

構成と内容

本書ではコリヤークの生活全体を見渡せるような記述を目指しており、そのために、扱う内容は多岐にわたっている。著者は「範疇化」というキーワードを軸に、時空間の認識、トナカイ遊牧を中心とした伝統的生業活動、衣食住の諸相から誕生と死まで、コリヤークを取り巻く環境のトータルな記述を試みている。

まず第1章では、コリヤーク語という言語そのものの姿を概観する。系統、方言分類、言語保持状況に加え、音韻・形態・統語にかかわる主たる特徴を略述することにより、コリヤーク語の輪郭を描き出す。続く第2章では、対象地域の自然環境をはじめとする地域的概観をおこない、この地域についての基本的な理解を促す。

第3章から第6章は、コリヤークの自然環境に対する認識と適応対処のありようを民俗語彙の分析を通じて考察する、本書の骨子にあたる部分である。第3章「時空間の範疇化」、第4章「生業活動の範疇化」から、第5章「衣食住の範疇化」へと、自然環境に対する認識の諸相が描き出される。それは同時にコリヤークの伝統的な日常と生活様式を如実に映し出すものである。一方、第6章「誕生と死の範疇化」では、人の誕生と死に対する認識と適応対処のありようが考察される。ここでは、自然的かつ生物学的営みであると同時に、ある集団のなかに産み落とされ、そこから去って行くという意味では社会的であり、また、霊魂・あの世などの観念と結びついているという意味では超自然的でもある、多面的な問題が取り上げられる。

巻末には、本書で扱われた民俗語彙のコリヤーク語索引をはじめ、言語名・民族名・地名および事項索引が付されている。

成果と課題

著者は何よりも、トナカイ遊牧民コリヤークの四季折々の生活全体が見渡せるような記述方法を採るように努め、そのような章立てのもとに議論を展開する。記述は、時に民俗語彙を民俗分類体系として分析することに成功している場合もあれば、時に民俗語彙を用いてコリヤークの生活を描写することにとどまっている場合もある。決して一貫して一つの方法論や枠組みに立脚しているわけではない。むしろ、事物につけられた名称の分節のあり方を手がかりに、それぞれの文化のなかに潜んでいる秩序化・組織化の体系を探る認識人類学に通じる志向性を持ちつつも、より柔軟な記述の構えをとったといえる。なぜならば、膨大な民俗語彙の集積が、常に民俗分類の対象になりえるわけではないからである。時間表現、地形の名称、トナカイの名称など体系全体を構成する要素が比較的限定しやすい領域もあれば、逆に輪郭が限定しにくく、ゆえに体系化が困難な領域もある。体系化が可能な語彙群だけを取り出して考察を深めていくというストイックな立場もあったであろうが、そのような方法が採られていないのは、対象がトナカイ遊牧という主生業を失い、固有の言語を失い、民族的アイデンティティを失いつつある人々だからである。

こうした点で、著者が、学問的整合性や理論構築よりも彼らの生活全体にわたる具体的な記録を残すことを優先したのは妥当な選択であり、むしろ評価されるべき点である。アクセスのきわめて困難なフィールドで、人々の信頼を得てこれだけの一次資料を収集したこと自体、称賛と驚嘆に値する業績である。とりわけ、①消滅の危機に瀕したコリヤーク語について、その民俗語彙を網羅的かつ高い精度で分析・記録した点、②フィールド言語学者として言語学的知見に立脚しつつ、言語と文化の境界領域を開拓した点、は高く評価されよう。

著者の観点や方法論などに問題点や課題が見出せないわけではない。特に現代社会における「民族誌」の位置づけ、コミュニティと被調査者に対する研究者としての立場など、さらに考察を深めるべき課題は残されている。しかしながら、一人の研究者による、言語を軸としたトータルな民族誌記述の試みは、これまでに例を見ないものである。また民族固有の言語と文化が急速に失われつつある今、この先もこの地域でこれだけの精度の調査と記録を行う可能性はもはや残されていない。その意味で、著者の独創的手法と入念な観察眼、およびすぐれた分析・記述能力には敬服するほかない。フィールドワークに携わっている研究者やフィールドを志す若い研究者はもちろん、広く民族文化に関心のある人々にもぜひ味読を勧めたい一冊である。

参考文献

呉人 恵

2003 『危機言語を救え！ ツンドラで滅び行く言語と向き合う』 大修館書店。

津曲敏郎

2010 「トナカイ遊牧民コリャークのエコロジー：ツンドラの人々は何も捨てないのか？ 呉人恵氏講演会」『北海道民族学』6: 117-118.

(つまがり・としろう／北海道大学)